

【事業実績】

京都国立近代美術館を中核として、地域の大学、盲学校、作家、視覚障害のある当事者と協働しながら、視覚だけによらない、誰もが楽しめる美術鑑賞プログラム(ワークショップやツール)の開発を行った。協働の枠組みとして、作家[Artist]、視覚障害のある方[Blind/ Partially sighted]、美術館[Curator]が連携する「ABCモデル」を構築し、三者それぞれが専門性・感性を生かしながらプロジェクトに携わった。

事業ウェブサイト <https://www.momak.go.jp/senses/>
本事業についての紹介動画 https://youtu.be/Jh3_kwjZEnk

■ABCモデルで開発した鑑賞プログラムを用いた出張ワークショップ(京都府立盲学校)

作家・視覚障害のある方・美術館の三者が協働して開発した、陶芸家・河井寛次郎にまつわる鑑賞プログラム「眼で聴き、耳で見る」を、京都府立盲学校への出張授業というかたちで実施した。作家の中村裕太が講師を務めた。活動の前半は河井寛次郎の作品を手で触れて鑑賞し、後半は粘土による造形活動を通して、寛次郎の作品づくりや暮らしへの理解を深める活動を行った。

日時:2022年12月20日(火)10:40~12:20(教員を対象としたプレ授業を12月6日に実施)

会場:京都府立盲学校高等部 多目的室

対象者:盲学校高等部10名(単一障害クラス5名(全盲3名、弱視2名)、重複障害クラス5名)



《生徒の感想》

- ・粘土を投げたり好きに触れたのがよかった。
- ・人によって作る形が違って面白かった。物をとりのりに人に渡して、共同で作るのは初めての経験だった。
- ・粘土での形制作が、自分の感性とリンクして面白いなあと思いました。

《教員からのフィードバック》

- ・寛次郎の作品に触れ、「この指止まれの形や!」と、生徒が叫んだのを聞いた時は驚きました。ほんまもんをいっぱい体験させたいですね。
- ・事前授業で知っておいたことで、生徒への言葉がけや身体支援で悩むことがなくよかった。

■ABCが協働した「さわる図」の制作

本事業では、視覚障害者向けの図工・美術の鑑賞の教科書がないという状況を踏まえて、京都国立近代美術館の所蔵作品を、さわる図・文章で表現する鑑賞ツールを制作し、全国へ配布している。

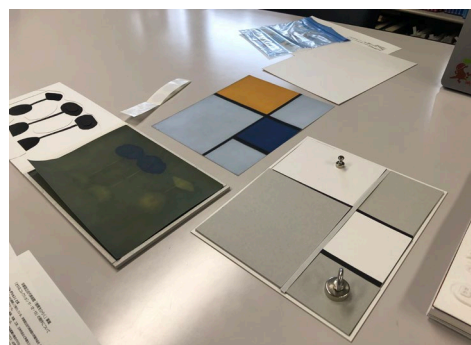
今回は、「輪郭線」と「色合い」を伝えることをテーマに、以下の2作品を選定した。そして今年度事業の中では試作品制作と視覚障害当事者による検証を行った。

強度の異なるマグネットシートで色面やモチーフの形を表現し、その上で丸い磁石を動かすことで、引っばられる力・反発する力を指先から感じられるような表現を検討している。

《選定した作品》

ピエト・モンドリアン《コンポジション》(1929年)

徳岡神泉《池》(1952年)



■所蔵作品をふれて対話しながら鑑賞するプログラムの実施

企画展「生誕100年清水九兵衛／六兵衛」に関連して、陶器とアルミ製の作品を視覚障害のある方と晴眼者がともに手でふれて対話しながら鑑賞するワークショップを開催した。

日時:2022年9月10日(土)①10:30～12:00 ②14:00～15:30

会場:京都国立近代美術館1階講堂・3階企画展示室

参加者:①12名(視覚障害者4名)、介助者2名、②13名(視覚障害者9名)、介助者2名

アンケート回答数:

実施報告:https://www.momak.go.jp/senses/workshop_kyubey.html



《参加者の主な感想》

・他者の鑑賞を言葉でかかせてもらうのがとてもおもしろく、「どんなのだろ?」と作品について想像するのも「こんなふうに見えて(さわって)いるんだ」と、ちがう見方、感じ方を知るのもとてもたのしかった。

・見えない方から「ここがほら、穴があいているよ」など、教えてもらいながら鑑賞できたのも楽しかったです。／目で見て感じることを見えない方にシェアしたところ「そう聞くと触った印象が変わってきた」とおっしゃっていたのも印象に残りました。

・視覚障害者は、その場にどんなかたがいらっしゃるのかわかりません。コロナ禍が長く続き、外出の機会が乏しい今日なのでなおさら、せつかくの集いの機会、最初の自己紹介は全員で行うなど、どんな方々と一緒なのか感じたかったです。感想もみんなでひとことずつ共有し、いろんなかたと感覚をわかちあえたらもっとよかったですと思います。

■研究会(フォーラム)の開催

「視覚だけに依らない鑑賞活動」や「絵画作品を視覚以外の感覚で共有する取り組み」について、各地の実践事例を持ち寄り、美術館関係者と共に考える研究会を行った。視覚だけに依らない鑑賞の取り組みは対象者や目的に応じてさまざまな方向性があること、そして全国の実美術館で今まさに模索段階であることが示された。

(1)「美術館は、視覚だけに依らない鑑賞経験をどのようにデザインできるか」

日時:2023年3月11日(土)13:30～17:00

ゲスト:中村裕太(作家)、藤吉祐子(国立国際美術館)

コーディネーター:佐藤優香(東京大学大学院情報学環、本事業委員)

参加者:22名

(2)「美術館は、『絵にさわる』(絵画作品を二次元の触図を通して伝える)体験をどのようにデザインし、届けることができるか」

日時:2023年3月12日(日)13:30～17:00

ゲスト:藤島美菜(愛知県美術館)、岡本裕子(岡山県立美術館)

コーディネーター:広瀬浩二郎(国立民族学博物館、本事業委員)

参加者:25名

